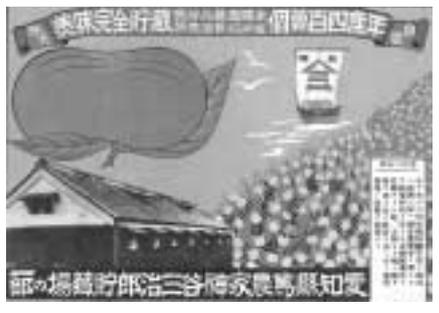


# 人物で語る 日本デンマーク

## ③1 神谷 三治郎

藤井町の西の端、西尾市に接した地点に防風林に囲まれたミカン園がある。取り囲む木々の背は高く、ミカンは若木も老木もある。中央に石の門柱が立つ屋敷があつて、総二階の本宅がある。その南には土蔵がある。間口は一八間半、奥行きが五間半、大きな切妻造りの屋根はすべて瓦葺きで、壁の高い位置に庇のつく通風窓が見える(挿図参照)。窓のある面は、全面にわたって黒い板囲いがはめられている。板囲いは、火災時には齋口で引きはずされ、類焼を防ぐ構造である。一九一五年(大正四年)に建てたミカン倉庫である。

この農家には全紙大の写真が保管されている。座敷



挿図は、たて一五センチ、よこ二一センチ、五色刷のミカンのレッテルで、戦前に木箱に貼ったもの。白抜き文字で「自園特長、美味完全貯蔵、年産四百萬個、全國園藝品評會金牌拾數回受領」と書かれている。船の帆に赤く染められた山型に三を描くのが「山三」の商標である。

三治郎は、ミカンをウラジオストクへも送った。果実が少ない彼の地では、高く売れた。日口戦争が終わったばかりの一九〇五年(明治三八年)には、自らウラジオストクへ渡り、高値に気を良くした彼は、市場調査のためにシベリア鉄道で大陸を横断、ドイツ・アメリカ合衆国をまわって帰国している。世界一周旅行である。一九一七年(大正六年)のロシア大革命のときも、三治郎は、ウラジオストクにいた。革命の混乱で物価は高騰、ミカンは前年の六〇倍の値がついた。三治郎は、礼束をトランクに入れて持ち帰ったが、ロマノフ王朝の紙幣は両替ができず、収入は例年並だったという。その後、彼は、ミカンの送り

先を現在の北朝鮮や中国東北地方(旧満洲)に変えている。

三治郎は、一八七九年(明治二年)高棚村で神谷武左衛門の三男として生まれた。一八歳のときに、碧海郡藤井村字南高根の現在の果樹園の土地に妻と二人で入り、人を雇って開こんに励んだと思われる。彼の兄弟は、だれもが三反歩の田畑をもらって出たというが、どのような経緯で藤井へ来たものか、なにも分かっていない。だが、北隣の字長洗の土地は、かつて「長洗原」と呼ばれた地点で一八八〇年(明治一三年)に県営馬耕農場が開かれた所である。当時は「愛岐日報」などの新聞がその成り行きをたびたび掲載していた、注目されていたが、ほどなく消滅したらしい。年代からすると、この農場の跡地の一角に三治郎が入ったのかもしれない。

彼の風貌は、甥や孫が語るところによると、小柄だがガツシリした男で、几帳面で働き者で、決断力のある人だった。家の者には厳しく怖い存在だったが、甥などには優しい一面のある伯父だった。ちよつとした金を動かしただが、暮らし向きは地味だった。

三治郎は、一種の大農経営を目指した。安城ナシの外地販売ルートは彼の紹介による。また、彼の倉庫は、産業組合の米倉庫に影響した。彼もまた、日本デンマークを支える先覚者のひとりだったのである。

文 天野暢保